





嘉永癸丑孟春新鐫

柳菴栗原氏校訂

重修真書太閤記三編

東都書肆 知新堂發兌

同會  
攻印

消  
川  
永

リ 5  
459  
21

重修真書太閤記序  
豐太閤非我國之也曰太  
閤生於尾而一家族屬譜  
系具存則安見其非我國  
之耶曰唯其焚故吾曰非  
我國之也我所謂豪傑者  
自夫源古府改來歷北條

大  
同  
記  
序



足利諸氏呂至織田氏毛  
利氏老田上杉諸氏之  
起於天下永祿間皆精其  
兵強其馬震耀其威蓋龍  
騰虎視彪赫相望而其志  
止于海以內其所爭不遠  
于隣比咫尺之間獨太閤

出百寒微頭角僅露既肩  
并吞明韓以志請織田右  
府以西征出仕難右府之  
宏才偉度且以為無當出  
言實以一笑而已然則自  
肩我國以來果肩太閤乎  
無肩也無肩則謂之非我



國之亦宜矣雖然太閤之  
非我國之乃所召大為我  
國之也何哉我國  
皇統綿二千萬古而非臣  
子之所宜問泉雖肩莫大  
無前之功然其名分不可  
踰越尺寸太閤知之肩素

且當時上肩織田氏我功  
日大則其勢曰逼太閤亦  
已慮之矣故謂平定海內  
就緒匪難而餘勇所逞將  
焉發出與其哭而君臣生  
隙動振古之國體不若一  
展力于滄波萬里外以為



快也若彼漢士創業者深  
智大畧非不絕之矣然其  
所為未全服之心且欲取  
而代之以於是篡弒相踵恬  
不為恠然則彼皆局量褊  
狹氣度淺短不能成其分  
視之太閤則相去遠矣吾

然後知太閤之大為我國  
之而非彼所謂豪傑者比  
也太閤一生以洪勲偉績  
兒童走平皆能道之而口  
碑以異稗史以訛遂相襲  
而莫以正者亦多矣栗原  
柳庵博洽國典且嘗往來



尾濃之際稽異證謬遂定  
為一部太閣記間注其取  
舍異同之辨欲便閱者於  
是乎太閣之功顯者愈顯  
而其疑啟未決者亦判然  
如揭矣書肆知新堂主之  
來請序故余論太閣之所

以為太閣者已置諸卷首  
嘉永亥 黠困敦素炆  
竹堂齋藤馨撰





重修真書太閤記三編總目錄

大岡記三編總目錄

重修真書太閤記三編總目錄



卷之一

秀吉明智と拒く後患を述ぶ事

并柴田勝家光秀を執成事

佐く木承禎防戦用意の事

并信長軍兵を進めく城を攻る事

卷之二

柴田木下軍議の事

并秀吉光秀時を限りく城責約束の事

木下藤吉郎和田山を攻取事



并城將山中山城守田中治部大輔等降參の事

卷之三

建部源八郎勇戰の事

并坂井久藏建部と戦ふ事

明智光秀箕作の城を落す事

并秀吉明智より寸志を施す事

卷之四

坂井久藏武勇恩賞の事

并塙長八郎武士とあり改名の事

信長觀音寺城へ使者を送る事

并承禎父子退城乃事

卷之五

三雲新左衛門尉觀音寺の城を守事

并秀吉名察三雲を退城せしむる事

木下藤吉郎守山の城へ寄る事

并堀尾茂助城中へ使節の事

卷之六

秀吉謀り守山の城を取事

并池田信輝種村大藏を撃事

柴田勝家日野の城を攻事

并蒲生賢秀防戦弓勢の事

卷之七



前田蒲生父子と降参をせしむる事

并信長蒲生父子と對面の事

前田孫四郎改名の事

并新公方家江州御動座の事

卷之八

三好等京都を退去諸城を籠る事

并信長公方を守護し入洛の事

岩成主税助青龍寺籠城の事

并木下秀吉岩成祐道を説事

卷之九

岩成祐道青龍寺退城の事

并木下勢芥川より岩成と合戦の事

木下一計攝河乃城を落去の事

并三好一黨四國へ退去の事

卷之十

池田筑後守籠城勇戦の事

并明智光秀鐵炮習練の事

松永久秀邪智降参の事

并新公方家攝州より凱陣乃事

卷之十一

木下洛中静謐の計略をなす事

并鶴見藤五郎洛中濫妨乃事



新公方家將軍宣下の事

并木下京都守護と承る事

卷之十二

三好蜂起河州を亂妨乃事

并將軍家防戰御手當の事

六条本國寺合戰の事

并竹中半兵衛重治智計の事

卷之十三

攝州御家人等為後詰馳登る事

并木下藤吉郎三好勢を破る事

彈正忠信長急上洛乃事

并秀吉萬全の計義と獻づる事

卷之十四

將軍家御所造營の事

并織田淺井兩家士卒喧嘩の事

將軍家御移徙の事

并勢州國司家騷動乃事

卷之十五

織田殿南伊勢發向の事

并大宮入道返答荒言の事

阿坂城攻の事

并木下武勇總門と破る事



卷之十六

大河内本城合戦の事

并木下藤吉郎池田信輝小謀を示以事

池田勝三郎大河内の總構を破る事

并國司方本城へ引入る事

卷之十七

楠正具船江の城へ密謀を通ずる事

并安保安居等寄手乃陣へ夜討の事

木下秀吉信長を諫むる事

并氏家安藤船江の城を攻る事

卷之十八

楠正具再度謀を行ふ事

并服部左京亮楠ふ一味の事

正具佐久間が陣へ夜討乃事

并長島勢信長の本陣を騒う以事

卷之十九

城兵等寄手の陣を亂妨の事

并諸將等再度本陣を圍む事

織田殿軍評定の事

并木下明智諫言乃事

卷之二十

明智光秀謀計を行ふ事



并野呂尤近逆心忽<sup>まやうしん</sup>に被<sup>あ</sup>誅<sup>ちゆう</sup>事

十兵衛尉光秀の謀計相違<sup>まがひ</sup>の事

并秀吉敵兵を捕<sup>とら</sup>え拷問<sup>ごうもん</sup>の事

卷之一十一

木下智謀多藝谷の館<sup>たけ</sup>を乗取<sup>のりとり</sup>事

并織田殿大河内城中へ使者<sup>しや</sup>を立<sup>た</sup>る事

國司父子信長と和睦<sup>わくごく</sup>の事

并勢州平定信長凱陣<sup>がいじん</sup>乃事

卷之二十二

信長上洛越前出馬<sup>しやうま</sup>の事

并朝倉義景防戦用意<sup>ぼうえん</sup>の事

木下明智軍議<sup>ぐんぎ</sup>の事

并手筒<sup>てづつ</sup>り峯落城<sup>たけおち</sup>の事

卷之二十三

朝倉中務丞景恒<sup>けいこう</sup>勇戦<sup>ゆうせん</sup>乃事

并秀吉仁智金<sup>にちぎん</sup>り崎落去<sup>さきおち</sup>の事

浅井父子別心<sup>べっしん</sup>の事

并信長金<sup>のりぎん</sup>り崎より引返<sup>ひきかへ</sup>以<sup>も</sup>事

卷之二十四

木下藤吉郎敦賀表退口<sup>つるかひのへ</sup>殿の事

并朝倉義景敦賀進發<sup>しんぱつ</sup>乃事

木下藤吉郎朝倉勢を破<sup>やぶ</sup>る事



并竹中重治朝倉を襲ふ事

卷之二十五

木下藤吉郎凱陣の事

并信長若州江州仕置の事

佐々木承禎蜂起の事

并杉谷善住坊信長を窺視事

卷之二十六

木下藤吉郎秀吉長濱仕置の事

并福島市松片桐助作出所の事

熟酔の浪人喧嘩の事

并加藤虎之助智計の事

卷之二十七

井上大九郎加藤う郎等とある事

并木村又藏零落の始終と語る事

清正知行を所望の事

并石田左吉出身乃事

卷之二十八

佐々木承禎長光寺の城を攻る事

并柴田勝家大勇防戦の事

長光寺寄手等水の手を取切事

并木下藤吉郎鯉江の城を乗取事

卷之二十九



勝家水桶を破りて敵を破る事

并信長柴田ふ感状を與ふる事

竹中重治樋口より降参を勧る事

并堀多羅尾樋口等織田家より屬する事

卷之三十

信長江州表發向小谷町家亂妨の事

并遠藤喜右衛門尉諫言愁歎の事

信長横山表へ陣替の事

并佐々中条築田等後殿の事

重修真書太閤記三編總目錄終

重修真書太閤記三編卷之一

秀吉明智と拒く後患を述る事

并柴田勝家光秀と執成事

明智十兵衛尉光秀新公方家の吹擧によりて容易く

織田家より在付御上洛の先陣を組み入れしむる事を

悦びありしを勲功を顯ししその身を立んと勇むる

が木下藤吉郎らよきと悦むる明智を暴ら召抱らるる

と信長遠慮の足ざり所ありとありひこれと諫めん爲

木下一人出仕して御前へ罷出たる度り抱られし明

智光秀ハ器量骨法凡人なるはゆいどもその心驕りて



人をもおもむくはるその上叛逆の相表ふ顯りければ  
行末たのりかた存は一將ハ得ごととやせどもそれい  
す各別の事よは諸國を遍歴し何方あもも遇所  
あきは何の大將もこれを疎んざしと形るべし願を  
君よこの處を御了見ありて退けよゆめく御身  
らく親しむるんことを勿躰かしと某が中上る  
を御用ひるくはるか御身小災を引出し中下と  
言上せし信長聞召渠が事ハ累代當國の住人よて  
我舅齋藤山城入道どのよ忠義と盡せしものあそ  
その由緒あるの形るは此度新公方家の御口入を  
ありかたし黙止ごき所よを疎くせんこやハ

何れと心得たりこれを退くんといふかたし叔  
此度の出陣を義兵の揚とせめあそ一人ありとも然  
るべし侍を擧用せし時節なり光秀とき勇士を  
出陣の期は臨み得る事先以て吉兆といふべし後  
ことおれ角もは此度の事ハ信長の心次第もも  
形がし新公方家のおがしめもおれむいけし  
も先陣小加え働すべし何故は後患  
あそんといややたし異心を懐き謀叛を企む  
とも此方あそ仁心を施し扶助を加ふるものあそ  
人木石にあそは彼あんが悦服せざるんや汝ら  
心を勞むることあそとのさす藤吉郎この度御先



手ふ加えたり随分武功を顯しけり左の時はその  
品より相當の恩賞ありあつべくは恩賞厚く成  
み従ひいひこれと退けぬかまふまふこれ即災  
を殖る道理よては斯やをば良士の材を妬むに似  
偏執ありとあがりぬれぬとんぞれども善惡に  
心よありあ處をかか言上せざるは又臣たるもの  
志にあはれぬされども後日よかるは左あんとあひ  
かぐ御氣は違ふを恐るこてや上げらるもまふ不忠  
なりいづれを後の患乃證據と申さる光秀が言葉の  
とく心得ぬもの多くはその上このごい軍師の格は  
用ひあふとていづ悦びげ見よては功を立すのち

賞これよ従ふ士の常ありけ然るといはず寸功を  
も立ざるに殿のいふ許させぬとも如何よ心小耻るを  
をい知ざるやこれ某が眼を付る所よてはたま君は  
新公方家の仰りありさにより飯は用ひさせぬとも  
狼子と野心をばし中さるゝの如く終るを悔させ  
あふその出来けり功あきになや大賞を得る意氣  
揚くと人とのきけり功ありてのち君の恩分なり男  
の心よあるふれどあはる時いづりて君をさるるやて  
害心を起しけりさてや君もあはれ心ありあ  
るど恩禄は行はせぬかごころるべしまたその通りふ  
行くを後いあは譜代古參の面々の恨をかきけり



あんこれすご當家よかりひもよろぬ災の種と蒔と  
やべー只今彼者ありとて君の鋒よらゆるべき理も  
なく又彼ものを先鋒よかえぬも君の御威光も  
いさぐり彼者忠を立ゆべき某むそりふこれを承り  
糾してゆへ安藝の毛利よ見参して奉公を望みゆい  
しかども去古老大將あれば一見のさだこれと心得  
ど氣あるありちよて衣服黄金をあさすまやうよ  
領國を追却ありとてや叔まの朝倉が恩分も輕き  
祿も中はまば然るを我身を立るたよりありとて  
退身形しくいと聞てゆされぬ君の恩をかり心地  
少くむとて身のためを専とあそなれば但その心

利よさささ道理小闇とておろえゆ能く御分別あり  
たくゆとやせしとて信長つりり聞召其方あつ退  
る休息すべし我熟く思慮とてとこのまひしとて  
木下敬君の御思慮ゆらんよ秀吉何を別お中  
べしとて退出びとて信長むりりこれを考へぬと  
いどもいづきよも新公方家の仰によりて先手組  
合せらるるもの形り是を忽ふあつためんを顔大將の  
業と思ふれはまを藤吉郎が中せしとて今やう  
一めらて違をあげまば明智がことを故あるべし  
嗚呼あやまてりくとおほしめ計をぬいしとて  
事すてふありし後あれば據るかおられく御氣色



より折節柴田佐久間との外乃老臣等出陣手分のためは出仕し列坐ありけるを御覽トやあいうは面々明智十兵衛光秀ハ武略あれども志のほど怖らしきもの親しく召仕あはせにあらばといふものありまことにさるべきやかの何とありあ心底をのこさばさういひやせとあうらるるを柴田佐久間承り何とあ十兵衛事由緒といひその身の器量といひ只このあざと見請りゆい御旗本おめし仕さく一廉乃御用立中べきものと覺えいと答えけり信長聞食され上あをさ思召よりて先手は加えあひしが只今然るうらばと藤吉郎がやにより其方共の異見と

聞ぢやとてかく仰られしとの給ふ勝家その時進と出く藤吉郎が支え中を更よその意を得む抑光秀を君小推舉ヤセも藤吉郎ありあ用ひあふらうらばと諫むも藤吉郎之然る怖しきものを殿は勧め奉り殿の御覺えよきを見てまゝこれを退け多と諫むるを藤吉郎が偏執と覺えはその故を光秀越前はありく新公方家小當國へ御動座を勧め奉りしと承るを以て餘所も殿の御威光を仰き奉る意の厚らを知べしと新公方家當國へ御越のら五千石乃禄とすく當國へ罷越御奉公と願ひ事より殿をかある天下は御旗と立らるべき君と見極めいと知ら



此の抑侍とてつくりしものなりとのけいはいらふ良將と  
擇んごかきくべきこと悪き筋あをいへるその上光秀  
が得る風雲天氣の術も時よく御用不立やべし  
その身乃武略もまた大形なれば見請けつを一方  
一手の弓鉄炮と御預けはともそれらどの働さハ仕  
るべしそれよりのら殿の御眼鏡次第を御旗と御預  
せしとも不足はやどおと藤吉郎が支えやを何  
ともいふべく存は是まど藤吉郎一人出頭して軍の  
機密を計らふくはが今まこのれが勸し光秀小風雲  
天氣の奇術あまばりくハ藤吉郎こそ身之光と掩  
るらんくと存し左ハやあるべし藤吉郎がや旨よ

よらせぬい光秀を退けあをいへる必上方に  
三好一味仕り阿波の御所の御味方とありやべし  
阿波の御所乃御味方たるもの此方へ来るは當方  
の幸や一當方のものを敵方へしるはこのやうに  
ぬこよてはその上光秀當國へ参りてもや日數を經  
るは當家の弓箭をもとろく見積りゆべしはるもの  
敵方へつくりゆらんを宜しき計ふあはれまぶく仰付ら  
せしまうみく御上洛の手を御あさきは方然るべしと  
中やうかむ佐久間も異儀成中ふ及ぶこれハ柴田  
佐久間平生木下と不快あるにより光秀を用ひらる  
なる藤吉郎が威勢あたらへんことをしりて斯ハ推舉



せし然もども實は信長疎忽小光秀を抱えらひあま  
けし先手小組入しと心の中心の中を悔しくおがめを  
ごも別は然るべき仕方も形く如何せやと思召して  
柴田佐久間の意見を尋ねるも二人こそ信長の  
意小従ふよりよき策もあくわす光秀とすめ  
用いられて木下と争ひめ終る木下と光秀と相闘  
りめあつた木下が不足の處出来まじし他  
の手とくると木下を斃て究竟のちりておのひ  
るも一入骨折明智を推舉せし信長も老臣等の  
中詞は就くやまろとけまげとあはれり光秀を  
めはらるるべきに定まりたりそのち木下あつて

御前小出しと此信長のまひりて諸老臣一同は  
新公方家の仰もすてさげまそのまに此度の先  
陣とゆき置るあるべしとやによりあつて定め  
しつるありとありけるを秀吉承えりかく  
は殿のかげめんは何とて某等が強ち拒  
やべさやとやて言葉少あ小退出をあるは光秀を  
遠ざけんと今度は限るべきまきよるき時節も  
あるべしと木下心中小秘たりるは只是諸葛孔明が  
魏延を何らふてたて光秀何様の謀を獻  
るもこれを容易く用ひあつたを魏延が孔明成性  
しつひ己が才用を盡を能くすと歎き如く自分



より身と引退くも至りあるとありはまり扱こそ  
殿の御心次第とやてあそひ諫むるもあそび  
しおろ

永禄十一年明智光秀四十三歳織田殿三十五歳  
木下藤吉郎三十三歳柴田勝家四十二歳と知べし  
光秀が學びし風雲天氣の卷あそ見れば今年光秀  
本命坎宮なり坎宮主命乃歳坎を遊年巽生家良  
天醫離絶體乾遊魂兌禍害震福德坤絶命と配當  
と越前より美濃を巽にあそ即今年の生家あり  
光秀これと頼と當國へ来りあそべし  
然も織田殿より江州と打破り新公方家御入洛

の路を開くんと美濃尾張三河北伊勢の軍兵を催  
促し四万八千餘人の著到披見のうへ永禄十一年九月  
七日出陣と觸る三州よりも松平勘四郎信一人數と  
率ひ来りて加勢の列よあそがへり信長大悦びあひ  
立政寺に參上あり新公方家の御氣色を伺これ  
今日まの御敵退治の為小出陣仕る不日これ等と  
切平けすもやう御迎を奉るべしその時とや御出  
馬あるべくゆりや十日と過しはまと言上あり  
これ新公方家御悦喜あそり朝倉が他國の義  
勢と待をなへしとやて事長くまき方便と打へし  
當國御動座のちいも五十日と満ざるに  
出陣の



と古も今もたれしれしる働さるまといと頼母し  
おがめしその行列を御見物あるべきより仰出され  
路次より出御すし御しり何さぬ只今四方より響き  
こころ織田家の陣立ありは隊伍整くして乱れど  
旌旗天を覆ひ人馬まさ勇壯あり大形ありを拂  
ひく見けし此もの向らんといふ形堅固の  
要害ありと一日片時たつらふべきや暴は攻落さん  
と疑ひるしと我見しに新公方家もわの思召  
つるより今御覽せらる所の中より一は御心安く  
おがめし近習伺候の面ももつり勇く敷たの  
りきとふおりの感歎乃聲あがりハ鳴も止ざり

けり先陣江州柏原に著バ後陣をいせ濃州の垂井  
赤坂へ又えり

岐阜より佐和山まで凡十四里廿六町といふこれ  
を二日は押さひ形を一日七里十三町ほりよ  
あつる四万八千餘人を二伍十人立とて八十町ふ  
立列ぶべし八十町を二里八町ありこれ當時行軍の  
法とらゆあまたなり

大將との夜に成菩提院に一宿ありゆけしに翌る  
八日は江州犬上郡佐和山城に著る浅井長政もこの  
處まぎ出迎ひ江南城への手遣いありと相談あり  
あひ爰小兩日逗留ありあがり人馬の息を休めぬ



佐く木承禎防戦用意の事

并信長軍兵を進めて城くを攻る事

此時江州觀音寺の城より六角承禎の右衛門佐義弼江南の諸侍を呼集め先頃信長より使者を差越新公方家御味方小馳参り御上洛の御先とつゝまつとさし中越よりたゞ新公方家當國小より御けるところへ京都の新將軍家の御頼によりおれを害し奉らんとせしものと今更信長こそしとて御味方小参り忠戦を遂んとハえこそやまどけ去により信長の使者より對面をばこれと追返したれ信長さぞめて軍兵を發し寄來らんと必定あり防戦の用意あり

てち叶あぐり敵も敵小寄を彼信長を美濃尾張北伊勢西三河の勢を率して攻上るものと定めて雲霞の如くあんとしんその上は新公方家を守立く故將軍のためは逆臣三好を打滅し母君兄君の仇を復さんとす義兵の首途あり味方當將軍の御為はあをを防ぐいと双方牛角の戦なり信長いうは猛しとも往昔永正の比大内義興義植將軍を守護して都へ攻上り勢あらずも過し義興九州四國の軍兵を率し山陰山陽の侍をもと駈催しつと巴いそ西國三十餘國が一のよおり寄りとありふ



義澄將軍を補佐し奉り先蹤もあり我も此の同ト  
將軍家の御争ひあり今の新公方家と申し出家遁  
世の御身と私り還俗しめい負氣あくも將軍の  
職を傾くんとするもある誰れ是れ與力し奉るべき信長  
田舎の育みて都の事と不案内なればさやどの方を  
取持あつめ然りとつても此國も信長へ心ざり代  
通ざる輩あまば油断すべきにあはば是併みかく自國  
安全の爲あり且將軍家への忠勤なり隨分粉骨  
して命をくらんと義を重く防戦いころべし忠あは  
格別の御感あるべし未練の振舞せばこれさる相當  
の罪科あるべしと理と盡して下知ありしはいづも

畏り奉るべし返答ありきりけり承禎父子これと聞  
さるべしその方便をかさるべしまづ和田山に要害を構へ  
人數と籠りて一件の地は海道に近く此は信長が勢  
の押通らんとする處へ打ち出一防ぎ防ぎらん小美濃  
尾張乃士どもたやとて切崩して通り得べしはその  
うち箕作と當城より援け戦を五日六日のほど  
これを支えしめし又さるて五六日と經るも乃  
あはば此外の城も敵をよせし攻戦あるべしさる  
るどあはば信長の本陣に却り無勢なるべしその處と  
見とゆし箕作和田山當城より梟の足乃勢とあ  
る打出一のりむむど形も敵を微塵も切平せんを



案の内あるべしとせられしむらびの義小同一  
多しにより去り手分とあはれしむらびの義小同一  
吉田出雲守と大將と吉田新助建部源八郎長沼  
隼人信田監物等と武者頭とて三千餘騎と籠られ  
たり和田山の要害と中山山城守田中治部大輔兩  
人よ三千餘人と屬武者頭三人と添てあはれ守らせ  
弓矢鉄炮玉藥あまご用意とせしむらびの楚忽小打出て  
城を付入ませしむらびの敵つりしむらびの固く守れ  
敵よりの追討して分捕せしむらびの約束に又日野の城よ  
蒲生下野守貞秀入道宗智嫡子右京大夫賢秀八百  
餘騎あし楯籠るこれの河邊左大臣魚名公より五代の

後胤田原藤太秀郷の苗裔累代當國蒲生の庄乃地  
頭職佐々木の旗下に隨一の名家之守山乃城を  
種村大藏大輔上坂主馬助一千餘騎よてあはれ守り  
水口の城より進藤山城守建部采女正一千五百餘人よて  
籠城を石部の城より伊庭出羽守里見内蔵助一千餘人  
と籠るし草津の砦あし馬淵治部大輔同藤五郎七百  
餘人を入置長光寺の砦よの上坂兵庫の助後藤傳八郎  
一千餘人と籠らせその外永原楯崎が葦八面くの居城  
またてこのりしむらびの方便と設られしむらびの防がんし  
西近江ある宇佐山堅田高島の城よの佐々木六角  
旗下の諸將等楯籠り都く枝城十八ヶ所あし及ぶ左むら

六月二十一日

二



の大家無双乃湖水を中みあし一騎當千の勇士幾千  
 萬といふ數を去るば要害によりてこれを守りいりおる  
 大軍たりとも恐るゝ小たゞと肘とくり氣と張る  
 待つげり然る信長佐和山より出張し高宮の庄に陣をうけしその  
 同十一日佐和山より出張し高宮の庄に陣をうけしその  
 あつりを放火し味方の軍威を示し敵方の容子を計り  
 りふよ六角方あもるひて期したるを形を油断なく箕  
 作和田山の両城を堅固に守りたやすく打ても出ばり  
 とて路傍の小城ありそのまゝ餘所不見るにわづら  
 是を攻んよ何とを先とせんとその夜ハ愛智川に陣  
 と取江州の地圖を取りし此邊の地理と考へ軍の

評議ありあひくろよ信長のこま様箕作和田山觀音  
 寺と三りの城いづれも鼎乃足の如く並び立しれども  
 觀音寺ハ根本あり外の二の枝城あり本城を落  
 しるむ枝ハかのげり崩るゝ然らばまづ觀音寺へ向  
 あぶさうと仰もいま終らぬ柴田勝家すゝ出  
 殿の御計らひ實はゆゝ聞えし本を絶る末を枯  
 ちとや譬あり某ハ先陣を賜るひあんとや打立の  
 奮しといささけるをみる木下藤吉郎敬て中はくこハ  
 勿躰るゝ御旋るをしく箕作和田山ハ味方の御陣  
 ちちりありも觀音寺繋るの枝城あり鼎の足乃相  
 救ふ意を以る築立し處あるふこの二いとすてこれ



より奥の観音寺へ取懸るゝ軍をさる難義あらん  
と見跡ある二川の城とより切ら出後詰仕りゆゑ味方  
と後と取きりれくすこる迷惑仕りゆひふん観音寺  
の城ハ某度、參向して案内を見覺えそいふ隨分堅固  
乃要害あり味方いうは猛りとも力攻まいなり  
うゝ若干の勇士を高さ石垣の上より落を大木大  
石ハ撃せんを情かりるゝその上進して観音寺の  
城はよく退く枝城の援兵ふくまされ味方大  
難義仕りゆゝ殊るゝ新公方家手初の軍あり枝城  
もあれ若あそあ易に就くまげ一城とおと  
はるゝ然あらんよ味方を勇氣とらげり敵ハ

氣と落をべーんげとる味方の勇威と以て氣と落  
したる城く小向ひゆゑ不日小大形落去仕るゝ枝城  
もろ落さらんよ本城むのそりたりとを終よハ  
自と落城をべーんげとる近きに付て箕作和田山  
と攻らるべくゆと諫めたり小柴田怒り聲して中様根  
成とて枝おのげり枯る道理もて根本と攻らんと  
最至極の道理ありさる佐々木六角代々の居城されハ  
要害もよるべー防禦の手當も厚くもべーされどもそれ  
ハ我等とくめ味方の兵士粉骨碎身して引破るべー  
枝城より援の軍兵きく共何れどのそりあつべきたそ  
箕作和田山と攻らるゝも外の城より援の兵の寄あハ



ぜんとい同トあるべし然らばまづ根本を攻抜く埒明  
くろがよわらよく覺ゆるものと居つけ高小のべし  
木下ことと聞えりや夫れその元の大勇氣とやべ  
々れども本城を累代の修築あり要害より枝城を  
一時の結構ありて堀石垣も整て居りども本城へ敵の  
寄ると見ハ國中のよりぬく後詰すべし箕作和田山へ  
敵責寄ることをその組くのりより加勢を出さるべし  
それら我國の掟までも知食ゆくとやけるにや諸士大  
あつと同一くこれども柴田一人はよにも心得をげよと  
いと不興氣小見くろけり

重修真書太閤記三編卷之一終

重修真書太閤記三編卷之二

柴田木下軍議の事

并秀吉光秀時を限りて城責約束の事

信長愛智川は本陣居られ軍評定ありける柴田は  
佐々木の本城觀音寺山と攻んといひ木下はその城乃  
要害よりして容易攻落しむべきと説くや乃公安  
る箕作和田山と乗取んと云は柴田が云箕作和田山の兩  
城を觀音寺の城の撃ぎ城ありて枝城の中より咽喉を  
むくべき大事乃要害ありてこれを守るもの亦剛勇の  
侍多しとべしその上にその路次なるを切所ありて勿く



不知案内の者の進むべき道にあらず然ば何ぞこれを安  
しといえんこれ小骨折て責落さざれば本城は力と盡さ  
こそ名譽と云べけれと云木下笑うおよそ城と責る法は  
守る人の剛臆と云のまにあらずその城の要害は審み  
その路次の嶮と夷るるを考えさて後兵糧の多寡  
ととくり知く爾してととめく一城を攻破しべし抑観  
音寺山の峯たぐ聳えて谷深しそれよ凭り築き  
城あるは長蛇方圓おのく其度はあらず陰陽曲尺す  
る地理は應ざりその上は石垣たぐりて登る路  
あく坂路九屈ありて多人數を推ふたよりあつたれ  
一朝一夕は造營せしあつたれば形りたの上は兵糧

玉藥累代の蓄あはて三年四年籠城の貯と餘せり  
あれは加ふるに六角惣領の居城あり一族諸士國民  
あつても多年の恩顧とありて力を極め身を致して  
防ぐんことを思ふべしと容易攻めさす謂あり箕作和  
田山の暴はめさ上し處なきは要害は於るその度小  
あつたぬ所あるべく陰陽曲尺その理小叶のぬ所あん  
これ某が攻安きと中處ありたゞ口論計は無益之  
某一手を以て今宵中は和田山を乗取明日の曉方は  
箕作と責ふをやべしとてのち本城へ取掛あつても  
猶奥の枝城を落して都へ押し通らせ給ふことその  
時の色次第ふれしと中により柴田驚き軍中小安



言ふ一然バ御邊一手と以て今宵中、和田山と乗取るべしやと、又攻めり落し得る、何とせしや木下若氣あり楚忽あり慎むとありける、秀吉いづく何とて妄言をいへば、今宵中といひ却る長一實らち子刻より卯の刻までに責落し申べし、この相違せむ、某あはむ軍議は加ふるべし、如何様の軍令にと甘んじて受ゆべし、早時近づき、打立んとし、勝家いづく三時あまり、和田山と取て朝がけは箕作と落はるべしや、秀吉いづく、和田山の地形峻れども急な築き、城ありて責むに最安、箕作と承禎が数年の間持固め、城あり、和田山と一様、い言がごとし、これども

是も明日の午刻より吉田出雲守と追出し申し、大丈夫何とて浮る言を申べし、い勝家あはむて、弥御邊の勢をうらみ責らるるや、御加勢を申さるるやと尋む、秀吉手勢のさるて責落さんと勿論、い別、御加勢を申し及む、去かざる、観音寺に御備を立ち、本城より万加勢のい、ん時の用心は、ねべらんやとおび、めし、けし、明智光秀を、めし、出され、木下が、中條何と思ふ、と尋させ、ぬ、ふ、より、光秀、い、し、り、る、中、ける、最前より、兩人の評定を承り、い、い、し、し、も、透間、る、聞え、い、中、ふ、と、木下、の、や、さ、る、る、處、必、定、勝、利、と

八州記二編末二

三



かひかろるべしたる。某新參あが先陣は組合され  
 るは身が初度の城攻を餘所に見物してまうり在ら  
 更よその甲斐あきあたりあられ和田山へ木下お責  
 らまはるる箕作と某は一攻をめさせ給りゆ。憚多  
 くはゆへとも光秀も箕作と三時うぎうて責落しゆべし  
 とやにより柴田心中に兩城を木下一人は落させんも  
 快くはこれら光秀を加ふる秀吉の功を減さるやと  
 思案して何様尤の所望ぞや木下一人を以て兩城  
 に向ふゆんを士卒乃勞もあゆ。箕作と明智小渡  
 然るべしとやにより信長聞食左様ふと。攻落すべき  
 方便のあれをたや二人とも同様は中らめ然らば御免

あるべき形をいとも秀吉何とありふと御尋ねあり  
 けり。秀吉中なるも明智乃所望悦び入る願はす。こ  
 もとや二の城を落し江州侍の肝を潰させゆ。や  
 と申叔光秀に向ひ免はく小君乃御為あり隨分忠戦  
 と。げ。後。但箕作と和田山とおか。殊更  
 明智も御手勢とては。小ゆ。某も和田山と  
 際。明。參。會。仕。る。べし。和田山は三時とやせども實は只  
 一時。て。と。行。中。づ。形。然。ら。寅。より。己。あ。て。の。中。小  
 箕作と責させらるべきありと。明智は新參なれば強よ  
 これ。成。論。ぞ。城。責。御。讓。り。忝。あ。く。存。ゆ。こ。も。あ。く。も。御。差  
 圖。に。依。り。計。ら。い。中。づ。と。柴。田。勝。家。お。り。ゆ。木。下



和田山と落し光秀箕作と攻落しふは同様對し乃功  
よておれしうづぼその上り和田山より木下埒明く參會  
ふしうんふも明智が功却く弱きふ似し是木下に  
城攻の刻と遅くあるしむるも然るべけれとおれひ  
依り兩人とも同刻に軍とてめ然して片時もあや  
落し一方と第一の勲功と立べし尤明智いとうぐしき  
手勢もふげとバ我輩も加勢よ加るべしその時刻い  
寅の刻より打立るふし己刻を限りと形して然るべし  
と定めしり藤吉郎うち笑ひ城をば實一時に攻とるべ  
くれども用意の隙よりゆ間三時と申せしと志し是は  
いづれと御指圖よ從ふべしと申て事もふげふ空うを

ふひり居しうけりてす観音寺の押小浅井とこの  
ませるしと申せしにより即長政のめと使をそつ  
観音寺と押えふしと申遣るし長政元より佐木  
六角とも親しこれ如何もあるし六角と信長と  
和融しめんと成意よあめしおれひ居る折節觀  
音寺小向く備と立たるん然るべしと思惟し  
返事ぶり信長の心よあるし然る旗本の勢をりし  
観音寺口と取切やと宣ひ專その用意をさりと木下ハ  
例の加治田稲田よ下知して此あつりの野武士を召集め  
くりに山谷の案内者五六百人よ及べり此者共謀と  
示し合せ加治田隼人稲田大炊青山新七同小助長江半丞



河口久助堀尾茂助七人と大將とあり十一日の宵より  
和田山の後廻り埋伏させ大手の鯨波の聲を聞たるば  
打立ろ斯くせよと教えさす一兵糧つるを武器を以て  
しけまばおのゝ涯分の手柄を顯とさんと勇とすん  
る六百餘人餘所の小徑とあるびくよ和田山へ越ゆるが  
残月光りありあり元山道嶮しゆる漸山乃半腹と  
越て上る路もかき去共くる処小駒とるものるれば少  
しも擬議をば千辛万苦して和田山の峯小のかり付  
あつより城中と見るよ岸より淵とのぞむが如くかくて  
六百餘人の野武士ども木下ろ授け謀の神り通ぜ  
ことと感と如何なる隙よめの人くむり密小爰の地理と

見覺えけんこの不思議さよとほろり怖と合とけり  
大手あら木下藤吉郎が手勢三千餘人浅野弥兵衛  
中村弥助木下小一郎大澤主水蜂須賀小六同又十郎  
等と武士頭と夜半より和田山の大手の麓に備へ  
篝火焼く嚴重小威を示し明早天よ攻上るべしと  
見せ藤吉郎むり本陣ありて約束の時刻よ打立んと  
待むり叔まこ明智光秀ハ織田殿乃手小従めて今日  
初陣の事といひ殊に木下と時刻を限るゝ箕作の城  
と責落とふき約束あれハ一大事の軍形りと心を碎  
き思慮を廻らけろ柴田佐久間等も明智よ功を  
立させ木下が威を減さんとあゆむかど加勢の為小



兩人とも明智は随ひ打立りその外信長の仰として  
坂井右近森三左衛門兩人は千餘騎をさへ添て明智  
と見繼しむ但明智は餘多の加勢あとも皆故參の  
歴くあれば万事自分の心にまうせは服心の者として  
弟の明智弥平次光春同次郎光忠郎等あを三宅藤  
三郎奥田久右衛門此輩のこみくその外のものとてハ  
このやど預られし五百餘人の足輕をりこされども  
老臣らちむめき厚くとは此度の軍ふ拔群の功を立ん  
と勇みすみけるも理あり

木下藤吉郎和田山を攻取事

并城將山中山城守田中治部大輔等降參の事

和田山の城は佐々木承禎が一族山中山城守長俊田  
中治部大輔吉政兩人と大將として選兵三千餘騎を  
籠りまて新ら築きける城あがく無双の要  
害あれは防戦は利ある様不構り抑織田家乃軍  
勢いまけ智川の流よそひし近隣と放火しこれバ  
餘焰おびく吹覆ひけつりの間は旗馬印風はさび  
き次第く小寄來る勢さうん見ゆとも城中より  
少もおそる氣色を顯さば美濃の軍勢もやよせよ  
江州武士乃手柄のやと見えんと勇氣とをさや  
あし海川處は十一日の夜半比より寄手ハ麓は陣と  
取しと見え遠篝火の影まき物騒ぐく聞あまは



城中あつても油断なくあつてを引付防ぎんと持場も小  
弓鉄炮をすき間もあつても配りつけりてあつても  
大木大石を集め置敵近よりいれと放さんとあつても  
のんぞおえりり山中山城守元より古今の軍物語成  
讀らうと攻る方便も守る道もあつても知らるるなれば  
八方よ心を配り搦手の峯さうとて登るたよりあつ  
けとて不知案内の他國ものいづと廻り得べんやそれ  
ごとと用意あつてあつても五百餘人を引つけてあつ  
と守らるる又本丸もあつても青木玄蕃元と者頭とあつても五百  
餘騎とあつても置大手の方いづとて大事あつても田中と共  
二千餘人とあつても一手にあつても持つてあつてもはくまもあつても美濃の

軍勢い寅の刻もあつても比木下明智一同小本陣と  
あつても出し左右にさつても和田山箕作へ攻寄る秀吉は麓  
あつてもすでと打立をいづと兵どもと一りとなり諸手小  
下知しと聞とつくり鉄炮を放ち和田山の半腹まで操  
上備と立ちと旋しあつても勇小勇若者どもと三千  
餘人同音と聞の聲を合せ曳、應々の響音小ゆとと  
責上る城中あつても夜深く敵の寄る氣粧りてあつても  
鉄炮と玉とあつても弓に箭とあつても今やくと待しあつても一人  
も敵の寄るを見れば待期もあつてもあつてもや退屈しと是と  
いくふと互と面を見あつても張令し氣もあつてもあつても見とる  
あつても然るふ只今まあつてもあつても敵のあるあつてもあつてもあつても夜中の



軍を難儀とて夜の明るを待ちしものありてすや  
茲時ぞ臆して敵はいつてるかかまへりて勇氣と出し  
命をすて持ちてめよやと透間も形く下知を傳えり  
まちける件の人数あめさ叫んが短兵急は押よる  
躰もさきさふと更は進み近くものもか城兵機  
を攻む待にまてども敵よせはあまといつと齒ぐと  
城あをど甲斐も那斯もると三度不及びかど  
城中の輩つめく氣を勞らり切り出て追拂んとの  
味方と勞らりその虚は乘入んとあはれものききぬ  
ありして音みせると諫めり一人も門外へ出はさるけ

とハ詮方あげは持場とては扣りとりとる内は時  
ちく形りしや木下時分なきやと人数をり上げ  
城ちくなりて関をつり鉄炮を厳しく打ちけ手はく  
攻りけとども城兵いま氣もつれ力もぬけし處  
あれば狼狽さるるのそあり果しく働くものもあし  
爰は搦てくむひり五百余人のものを共はしめ嶮  
しき山路を二時計よおし上り城のうりし廻り井樓  
を組あげりしれを木下が下知よて手にて材木一本づ  
ゆいせざるを何の用ともいはずりしや但不審きて  
のそありけるがあらして始り井樓の用なりと知と  
けとバ今よとめぬとかがり木下が深慮のほどと



感<sup>かん</sup>ドけり彼<sup>かれ</sup>是<sup>これ</sup>といふうち井<sup>い</sup>樓<sup>ろう</sup>三ヶ處<sup>さんかところ</sup>組<sup>ぐみ</sup>あげかバ  
 ち<sup>ち</sup>は小<sup>こ</sup>のちり<sup>ちり</sup>と<sup>と</sup>城中<sup>じやうちゆう</sup>と<sup>と</sup>なるに<sup>に</sup>は<sup>は</sup>づ<sup>づ</sup>ま<sup>ま</sup>廿<sup>に</sup>間<sup>ま</sup>なり<sup>り</sup>と  
 引<sup>ひ</sup>去<sup>き</sup>し間<sup>ま</sup>あり<sup>り</sup>役<sup>やく</sup>所<sup>じよ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>及<sup>およ</sup>び<sup>び</sup>手<sup>て</sup>小<sup>こ</sup>取<sup>と</sup>り<sup>り</sup>  
 し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>は<sup>は</sup>是<sup>これ</sup>の<sup>の</sup>ほ<sup>ほ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>大<sup>おほ</sup>手<sup>て</sup>の<sup>の</sup>容<sup>よう</sup>子<sup>す</sup>と<sup>と</sup>伺<sup>う</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>や<sup>や</sup>曉<sup>あけ</sup>と<sup>と</sup>  
 る<sup>る</sup>東<sup>あづま</sup>雲<sup>ぐも</sup>の<sup>の</sup>空<sup>そら</sup>小<sup>こ</sup>う<sup>う</sup>つ<sup>つ</sup>る<sup>る</sup>炬<sup>たきまろ</sup>乃<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>木<sup>き</sup>の<sup>の</sup>間<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>に<sup>に</sup>む<sup>む</sup>る<sup>る</sup>  
 旗<sup>はた</sup>の<sup>の</sup>氣<sup>け</sup>色<sup>しき</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>ほ<sup>ほ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>小<sup>こ</sup>響<sup>ひび</sup>く<sup>く</sup>時<sup>とき</sup>の<sup>の</sup>聲<sup>こゑ</sup>次<sup>つぎ</sup>第<sup>だい</sup>に  
 ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>聞<sup>き</sup>か<sup>か</sup>し<sup>し</sup>追<sup>お</sup>手<sup>て</sup>の<sup>の</sup>軍<sup>いん</sup>既<sup>すで</sup>に<sup>に</sup>も<sup>も</sup>ほ<sup>ほ</sup>り<sup>り</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>ゆる<sup>ゆる</sup>ぎ  
 け<sup>け</sup>く<sup>く</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>鉄<sup>てつ</sup>炮<sup>ぱう</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>け<sup>け</sup>く<sup>く</sup>搦<sup>な</sup>手<sup>て</sup>と<sup>と</sup>破<sup>やぶ</sup>と<sup>と</sup>や<sup>や</sup>と<sup>と</sup>ふ  
 儘<sup>まま</sup>又<sup>また</sup>五<sup>ご</sup>百<sup>ひゃく</sup>餘<sup>のり</sup>人<sup>びと</sup>の<sup>の</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>共<sup>とも</sup>め<sup>め</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>く<sup>く</sup>井<sup>い</sup>樓<sup>ろう</sup>の<sup>の</sup>上<sup>うへ</sup>より<sup>より</sup>火<sup>ひ</sup>箭<sup>や</sup>を<sup>を</sup>  
 射<sup>か</sup>け<sup>け</sup>作<sup>つ</sup>り<sup>り</sup>並<sup>なら</sup>べ<sup>べ</sup>し<sup>し</sup>役<sup>やく</sup>所<sup>じよ</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>焼<sup>や</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>を<sup>を</sup>防<sup>かぎ</sup>げ<sup>げ</sup>んと  
 あ<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>そ<sup>そ</sup>あ<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>め<sup>め</sup>く<sup>く</sup>所<sup>ところ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>ほ<sup>ほ</sup>く<sup>く</sup>鉄<sup>てつ</sup>炮<sup>ぱう</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>

玉<sup>たま</sup>の<sup>の</sup>飛<sup>と</sup>と<sup>と</sup>雨<sup>あめ</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>よ<sup>よ</sup>み<sup>み</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>拳<sup>こぶし</sup>さ<sup>さ</sup>かり<sup>り</sup>小<sup>こ</sup>射<sup>か</sup>る<sup>る</sup>箭<sup>や</sup>ハ<sup>ハ</sup>更<sup>さら</sup>も  
 仇<sup>あや</sup>箭<sup>や</sup>ふ<sup>ふ</sup>く<sup>く</sup>殊<sup>こと</sup>よ<sup>よ</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>處<sup>ところ</sup>ハ<sup>ハ</sup>鳥<sup>とり</sup>獸<sup>けもの</sup>と<sup>と</sup>た<sup>た</sup>や<sup>や</sup>す<sup>す</sup>く<sup>く</sup>通<sup>とほ</sup>り<sup>り</sup>ぬ  
 む<sup>む</sup>人<sup>ひと</sup>乃<sup>すなは</sup>来<sup>き</sup>べ<sup>べ</sup>き<sup>き</sup>路<sup>みち</sup>ふ<sup>ふ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>心<sup>こゝろ</sup>を<sup>を</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>り<sup>り</sup>夜<sup>よ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>酒<sup>さけ</sup>  
 酌<sup>しやく</sup>め<sup>め</sup>と<sup>と</sup>した<sup>した</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>興<sup>きよう</sup>ト<sup>ト</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>し<sup>し</sup>眠<sup>ねむ</sup>を<sup>を</sup>め<sup>め</sup>め<sup>め</sup>し<sup>し</sup>  
 誰<sup>たれ</sup>怠<sup>た</sup>ると<sup>と</sup>那<sup>なに</sup>く<sup>く</sup>甲<sup>かぶ</sup>を<sup>を</sup>脱<sup>ぬ</sup>て<sup>て</sup>枕<sup>まくら</sup>と<sup>と</sup>前<sup>まへ</sup>後<sup>のち</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ば<sup>ば</sup>あ<sup>あ</sup>  
 くれ<sup>くれ</sup>む<sup>む</sup>さ<sup>さ</sup>む<sup>む</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>大<sup>おほ</sup>勢<sup>せい</sup>が<sup>が</sup>井<sup>い</sup>樓<sup>ろう</sup>組<sup>ぐみ</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>ざ<sup>ざ</sup>り<sup>り</sup>け<sup>け</sup>  
 大<sup>おほ</sup>手<sup>て</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>小<sup>こ</sup>聞<sup>き</sup>か<sup>か</sup>る<sup>る</sup>関<sup>せき</sup>の<sup>の</sup>聲<sup>こゑ</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>余<sup>よ</sup>所<sup>ところ</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>小<sup>こ</sup>聞<sup>き</sup>か<sup>か</sup>り  
 ち<sup>ち</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>め<sup>め</sup>く<sup>く</sup>む<sup>む</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>要<sup>えい</sup>害<sup>がい</sup>よ<sup>よ</sup>翼<sup>つばさ</sup>あ<sup>あ</sup>き<sup>き</sup>と<sup>と</sup>め<sup>め</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>と</sup>  
 も<sup>も</sup>及<sup>およ</sup>び<sup>び</sup>た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>と<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>ひ<sup>ひ</sup>驕<sup>おご</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>酒<sup>さけ</sup>乃<sup>の</sup>咎<sup>とが</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>う<sup>う</sup>し<sup>し</sup>ヶ<sup>ヶ</sup>様<sup>やう</sup>よ  
 打<sup>う</sup>と<sup>と</sup>け<sup>け</sup>たり<sup>り</sup>と<sup>と</sup>る<sup>る</sup>耳<sup>みみ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>小<sup>こ</sup>一<sup>ひと</sup>聲<sup>こゑ</sup>む<sup>む</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>矢<sup>や</sup>叫<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ふ  
 役<sup>やく</sup>所<sup>じよ</sup>と<sup>と</sup>の<sup>の</sup>燃<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ぐる<sup>る</sup>と<sup>と</sup>見<sup>み</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>れ<sup>れ</sup>を<sup>を</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>ど<sup>ど</sup>ら<sup>ら</sup>け



どらも猶敵の廻りしころおひもよろづばこれ下部が  
手過おや打消とせ廻るそのありさほを井樓より  
よろしく見定めさしりめ引つゝ射とりけは以乃  
外は散乱し疵を蒙るその數をくらばざるほほど小黒  
烟天とこが大手のめくあびきうらば大手の大將  
山中田中おとせとく搦手の雜兵等が怠りあき手  
あやまちぞとおひひく山中田中よむひ御邊  
搦手へ御廻りありさ火の手をかせぶあへて鎮め  
ぶい本丸あやめといふより三百計の人數を隨へ  
田中の搦手へく行又本丸の武者頭青木玄蕃も  
焼亡は驚き駈付見とば搦手に置侍五百餘人烟の

中小醉眠しけるその處へおひひもよろづぬ山上より火  
箭鉄炮を射くけ打出し有るによりおれがため  
大形討と討のこされしを共火は焼も烟も迷ふ  
く倒れふあきさすらあるのそたるをば青木  
玄蕃本丸より召具したる兵士は下知してまづ役  
所くの火を鎮めんと働くと木下が手れ者ども山上  
よりお水をとく爰とらげさば乗入やと身軽く出  
立忍びよあきし若者もを印しくと堀小取付あけ  
上り五百餘人が一人も残らば城中へ亂しり火を  
消さんとあけさる城兵等とく打斬倒し打  
ふせを廻り勇を振りおたさかきてこれ



立たちたるる 驅ひ武し者やどもも 一い支しももささるるをを落お足あふふりりけける  
ああままりり 青あ木きももいいままはは防うぎぎりりのの一い先さみみをを引ひ退ききき方か  
便びををめめくくこれこれをを責せんんととああるる處ところへへ治ち部ぶ大だい輔ほ三さん百ひゃく  
余あ人ひとああままりりててまませせ来きりりいいままどどもも味あじ方かたハハ散さん乱らんししてて纏まとわわるる  
むむ敵てきらら城しやう中ちゆうににままりり満まんちちれれババ叔しやくととやや織お田でん勢せい搦な手て  
とと乗のり取とりり形かたちららんん爰こゝああるる防かぎぎ止どめめんんとと誠まこと小こ難なん儀ぎああるる  
雇ひららしし然しかババ本ほん丸まるへへ引ひ籠こりりくくままりり謀まわらむむ取とりり  
すすべべししとと本ほん丸まるささしし引ひ退きくく山やま中ちゆう山やま城じやう守しゆうハハ大だい手てふふ  
あありりるる爰こゝとと大だい事じとと防かぎぎららるる木き下か藤とう吉きち郎らう城じやう中ちゆうのの騷さわ  
動どうとと見みてて時ときををよよけけるるやや進すすめめ速すみにに乗のり入いりりしし下げ  
知ちししけけままババ此この手てのの勇ゆう士し三さん千せん余よ人にん一いつ瞬まももきき堀ほり際ぎはへへ

おおししめめ無む二に無む三さんはは攻こう立たままババ山やま中ちゆうもも死しををのの狂くるまま  
入いりりとと聲こゑととにによよばばるるをを聞きくくままりりいいふふ兼かててのの手て配はい  
皆みな空くうししくくあありりけけるるややととおおどどろろきき騷さわふふ心こゝろももああるる  
ああるるははまま防かぐぐ鉄てつ炮ぱう守しゆうるる箭や先せんももままりりににななるるをを  
得えるるららとと木き下かがが兵へいとと乗のり入いりりにによよりり山やま中ちゆうももいいききれれ  
ままりりとと立たちちるる處ところへへ田でん中ちゆうがが兵へい士しららんんとと来きりり敵てき本ほん丸まるとと  
攻こうんんととははそそののをを棄すてて早はやくくここののかかへへ引ひかかへへとと呼よびび取とりり  
ああままりり山やま中ちゆうもも爲せん方かたななくく打うちののここををれれ兵へい士しをを引ひくくららおお  
本ほん丸まるへへ退きききけけままババ木き下か勢せいららるる安やすくく大だい手てのの丸まるとと乗のり  
取とりり諸しよ本ほん丸まるへへ押お寄よきき一いつ攻こうせせめめんんとと形かたちららるる處ところへ



搦手より廻りて五百余人も一所にあつたりけりよ  
より木下これと賞して惣軍を集め急ぎ攻る勢  
をあらねば果ては攻ざりけむと城中あきくも  
今を城とてして箕作と一州よりあつたりけりよ  
者も多くありける氣色を見し使と本丸へ遣り軍  
の習ひ弓箭の道是れもあは罪なき士卒を失ひけり  
何れせん面も信長は恨る一旦義の向ふ処止むを  
得ざるのそなはれはやく出城ありて承禎入道も和  
議を進め給ふんと一族家老衆の忠義あるべしと申  
りけりよ山の中田中も理は折籠城の兵士乃命を  
御助あつんとあはれ我々二人降参仕り城を御渡り

やぐと返答せしにより木下もけりて成就せしと  
悦びその通り相違なき旨を遣りけるに山籠  
城乃兵士もくく出でて山の中田中兵仗を帯び  
木下の陣に降参し秀吉これと請取二人戎召具  
本陣へ送りけるよ時を辰のちめ之實も一時  
半むりり小和田山を攻落し大將二人を降参させ  
味方よ手負さくかく十分の勝利ありとて第一の勲  
功とぞ感ぜられけり木下すかち山の中田中を大將の  
前より引出し見参の式を取繕いけり神妙のことや  
宣ひ木下次第たるべしと仰出されしに木下  
の組下とねりて山の中六角家へ歸参して和議を



取あつふべし田中ハ止りし忠勤と盡はるるを定たりけり

織田家譜よ和田山を押し置き箕作を攻箕作落  
り和田山落るといふと路次乃順次和田山あら  
てのら箕作へ取掛るなるべし知るや木下和田山  
より箕作を攻ふ加たることいふ今これより従ふ  
又云田中久兵衛長政近江國高島郡田中村の人  
父と伯耆介家繼といふ長政六角家より従ふ  
兵部大輔と稱し木下は仕えり吉政と改むと云

重修真書太閤記三編卷之二終

重修真書太閤記三編卷之三

建部源八兵衛勇戦乃事

并坂井久藏建部と戦ふ事

明智十兵衛尉光秀箕作城を攻んと木下藤吉郎同時  
に本陣を進發しけり柴田佐久間加勢とて一所小打立  
寅の下刻は箕作の麓まで一寄明智を城責乃工夫  
かゝりし夜明けに都合あり夜明を待て  
城兵を偽引し謀を以て乗入るとおひ備を固く  
してさきに動くは柴田佐久間ハ自身より好んで加勢  
よ来れども元より老臣乃事なり光秀より下智小付べき



このあつと只此手小て自の功と立んとおのりよるもあま  
い夜の明るを待よ及を以曉らうとや兩人の勢どもは  
山の半腹までお上て扣らう勝家信盛二人をのつて  
先陣よ進むも長氣ありとありべ麓よ在て光秀と  
共よ備へたりし二人の勢二千余人いさゝと進んで攻上  
関の聲を揚鉄炮とらあら短兵急よ攻落さんとあ  
けり小城の大將吉田出雲守少しもさうらびらうて用意の  
大筒を打出し大木大石を投出し防ぎけらぬどに柴田  
佐久間の手もの者二千余人心ハ猛しとらども進も得ど  
たふらう見へける処を建部源八兵衛とら敵ハ浮足ある  
ぞ打て出てうひらうせと云すに手勢五百余騎を引率し

て切て出

建部源八兵衛秀明ハ建部三郎左衛門頼昌の次男与  
八郎秀治の弟之與八郎秀治兵部大輔と称とこれハ  
箕作乃城よ討死し秀明ハ和田山よて合戦しけり  
和睦よあつて城とらう後大坂本願寺合戦よ討死  
すといふ一書よハ源太左衛門秀昌の長男源八郎秀治  
乃ら小采女正と云秀治の嫡子と源八郎秀明といふ  
ともあり  
江州無双の勇士といひ打物取て手利あり真先小進て  
あれハ美濃勢あつて大將もあき若武者之只一うけよ踏  
らうとてべしと喚き叫で打うと源八兵衛自ら鎗を捻り



前後左右當ると幸突立ちけ立馳廻りしに柴田佐  
久間が先手の兵士散りしにこれ騒ぎ坂下へ真しくた  
欠落さるる逸足出して逃歸る源八兵衛へ柴田佐久間の二  
千余人と坂中まで追散りしに氣色よくて城中へ引返すと  
勝家は是を見て大に憤つてせんおきよの共ぐそる軍  
て敵の氣を付しその口をさよさるる某攻りしに  
その建部は手柄乃れどを見まじしと手勢をさげ  
はし下知しけりしに光秀もさしと押しめ御勢の引歸を  
しに却て味方の仕合あり元より敵を偽引しとあも  
ひしに処あり然るに建部打て出しに味方勝利の瑞相  
形り坂中より嶮しと承る卒尔おしに誤らわらしと

諫らきて勝家やうく鎮りしに光秀時刻を考へつ  
らき時分形り何れも一骨折て給しと觸りしに心得  
ゆと立上るるの時坂井右近將監政尚初盛種乃長子久藏  
生年十四歳いまだ總角乃兒なり生付大膽不敵おし  
て力あつたて強く七ツハツの頃より武藝をこめと太刀  
打も妙を得鐘よ練習しければ生長乃後名譽の勇士  
ともあつたきもの心よみうく喜び愛憐ししけるよ  
ろくして十一歳の時戦場よ赴き敵を突しを首を取  
て歸りしにそのふしに今日も父が供して大將の本陣よ  
あり但大將の觀音寺城の押えしに備を立てしに備を  
旗本よ軍をんしとるるよと思ひけるよ久藏



一人郎等二人を先づ引れ本陣を抜出箕作山乃麓  
 いたり合戦の様を問ふ柴田佐久間の手の者共建部源  
 八兵衛一人を追立られ見苦しき負軍せしと噂するを  
 聞てそれた我身乃耻辱あるとおをひげはいうも  
 して能敵を打味方の負軍を切之さんと主従三人望  
 うよ山上より乃り城の際まで進みしを知らぬ  
 てあるをけり久藏心ふとくも城兵の引後く只今門  
 を入ける処へを寄て扇を開きこれを招き今曉の  
 軍は打勝て手柄を勇士は何と申人よと人の人乃  
 名字をときまふやけり然し柴田佐久間乃先手  
 のあし輕くも切崩しをいひいさのて手柄ともい

それけりせめて侍一人を討取むひて大將乃實檢  
 いれ後の代までのおたり草もあつてまかく中ハ  
 織田家の武者頭まで坂井右近といふものを嫡子同苗  
 久藏生年十四歳幼稚なるれども名あつてそのをちやく  
 打出て戦を決しむく小腕あつても尾張武士の手柄を  
 ととて學びて見せしとんと呼ぶけりけり建部源ハ  
 兵衛擧ありてこそを聞きはを開てよく見ると十三  
 四歳の小冠者ありがあれを相手に打出んもあつて  
 る一々棄て置いと下知もあつて返答もきてありけ  
 ると久藏大腹を立比真なる人なる跡を慕ふて来  
 つしものを出向もせし引籠り居るへり侍の法も



知ぬまの共うまさてい足輕より合とひのうと侍と  
軍とるまどべとぬう去とて侍怖るまきう幼  
稚るれども獅子の子の獅子に似るまのまの箭一  
筋まで拳の力を知まやと云まに弓をり取て打番  
ひ矢倉を目當り切てまてばあやまらば狭間乃板を  
射通して矢尻五六寸をり射出したる櫓まありけ  
る侍ともあれを見ていうらま十四歳と名乗るまあを  
せくそれやどるまきにの弓勢をたのまけり  
生長きはいうらま名譽の弓取とありらんもあま  
らどとを感りげ源八兵衛久藏が振舞凡物るまびと  
おまひら小冠者の口さうまらまも悪ま一あて

當てあまらま生捕て人質をせまやとおまひ只一騎  
馬をせ出まらま小人乃詞るまあまら志のい  
まらま手捕まらま我手許まらま仕ひ武士れら  
まらま吳んむるまや城中へ入まらまわられけ  
るを聞て久藏莞尔と打ま御芳志のいたり過分に  
覺えまといひま鐘おつら馬を馳出ま突てのる  
源八兵衛の鐘まもらま太刀を抜ま徒手を引げま生  
捕んと追廻る久藏馬を飛まこと疾風の如く鐘の穂先の  
いらめくま電まらまはやくまらまの源八兵衛あまら  
うぬ手にあまらま見えまらま太刀を抜まらま鐘を切  
折てらら手捕まをまやとあまひ久藏り突入る鐘まら

水戸記三編卷之三



つゝと切きられて久藏馬と久き源八兵衛左へつた  
右の手とる左の手まで久藏ととらん追うけ  
既久藏捕えらるゝ見え一処小麓より貝を吹  
立大勢押寄る聲聞えりふら源八兵衛馬を引  
返一城中へ入

流布本久藏源八兵衛又組付たりし源八兵衛  
引抱えく城中へ入んとする久藏が郎等主を取返  
さんと太刀を抜く切くゆる源八兵衛より是と  
切てよて今一人を切て誤て太刀を取落し是を取ん  
と久藏を抱えらるゝ落馬きかば久藏源八が  
首を取立上る是れめえられら久藏刀を抜

源八脇腹を刺たりし然れども源八兵衛討  
死箕作又わび依れとす

寄手と手間もち馳登り鉄炮をひく打りたり城  
方ても随分骨折防ぎける間更勝負も見へらる

小信長の櫓は塙の長八らよのけり来り切所を盾  
とる勇とある命かぎりと戦う去共敵の大勢味

方ハ長八只一人とて小危ふく見へ一処へ森三左衛門坂井  
右近明智が計策に従て攻上ると此体を見つげ長八  
ととあつてけりや者共とよはふ小真しとる馳らん  
長八あつて力を得能首一打取く庖口とる引退く  
坂井右近森三左衛門一千余騎とて城兵とて戦ひけり



城中より見よし武者頭衆我もくと打く出鐘  
 先とそろへて突立る織田方あれと防ぎうの森も坂井も  
 うまへと四度路よりうく敗走と城方よて勝より  
 て追下し潮のうく如く駈立ると大將吉田出雲守大制  
 一長追せ誤あらんや引上ると使番を以て下知され  
 どもそや切ら壮者どもあれは耳も更又聞入と心  
 く追討とろぐおとろくに猶深くと進む行と  
 出雲守も今のなう兼城戸をうきき馳出味方  
 と制し止めんととるたつけれ  
 明智光秀箕作乃城と落と事  
 并秀吉明智と寸志と施と事

坂井右近森三左衛門兩人の元來明智の圖より態  
 と敗走して城兵を偽引けに城兵あれを知どしたひ  
 来つて追ひくるとで小坂路を半過て下りしる木下  
 藤吉郎和田山と落し織田殿よりけり箕作と等閑の  
 城地よあらむと落去延引せば他乃城持とも加勢  
 て妨あふし少もそやく攻落とくと利あふしさあ  
 らんふは某も只今らと加勢仕るべしそ手勢五百  
 と引きけ明智の陣よ来る光秀あれを見く大よ  
 あせり貴邊あは和田山と隙明あひしとやと同れ  
 て木下とさしけ既に和田山と抜てけり勿論當城と  
 あるし様少りべきよあはとと先しちやけり御

大関記三編卷之三



本陣より吉左右より中も待遠くの間御見舞も察  
つひ時限乃事又あまづら御配慮あるまじく始終の  
勝と専と御心づけ成ゆべし但し兼て乃御計策大  
形とのひゆひつらんとたならぬれば光秀さん大半成  
就仕りての御覧ゆ味方の先鋒敵も追立られ坂路  
乃半あるとまで敗走乃体ゆい今少し敵追来ゆ  
ゆ某り思ふゆにゆと答ふまはば藤吉郎もやを乃心  
とさとり明智まは御手勢とくなく事ゆ乃ぞん  
御難義あるべく覚えゆの某り召具しての輩は日頃  
某り調練ありたるゆゆのゆゆと御手小付られてゆ  
遣れゆとゆ光秀御芳志の段誠ゆ中尽ゆゆゆ

然らば仰小従ひゆべしとてほづめ信長より預られし五  
百余人と只今木下ゆと与へる五百余人とあるとて  
一千余人と左右二翼とるゆ一従弟ありける弥平次同  
次郎二人又ひゆの密小ゆけるは木下ゆかゝる五百余  
人の頼むゆゆゆ汝等ゆく心得ゆくるゆゆ仕損ゆると  
あるゆゆゆ含め味方の敗走ゆると追うゆく敵ゆを来  
らば真中と明て開き通し半過駈驅つゆと打ゆ時  
左右より鉄炮を打ち透間ゆくゆも立るゆ敵あゆ  
散ぜざるゆきその時急小責ゆゆり城戸際又迫る  
ば遂又付入ゆ入つべしあの手筈をぬるゆると懇  
さとりとゆ又木下ゆゆゆなる勢ゆゆ引まけ麓



一町をうけて上なる道の左右小備と立光秀も傍より引  
添てうらうらうけるおろろと森も坂井も城兵も追  
うけられうの坂路を真くうらに馳走してうと城兵ついで  
て追下しける勢殆ど輪寶の山を下るがごとくして中  
途より引返をべきにわらざれどもまき森坂井  
が勢小引つらう追たりけるを吉田出雲守長追ちをそ  
と鞭をあげくられを止むれどもまきうぬうらうと  
追行けまは吉田大又怒り悪き壯者ども乃ちうらまひ  
くちのみ今敵の大返しふあまう見苦しき負とるまき  
まきをちや返さくと大音聲よまはをれべいざうらば  
馬を返さんとあうける處を光秀とまき相圖の銃炮を

一うら放つやいもや左右二翼の一千余人筒先をうら  
てをあらうけまきびく跡又續ひく追うけれを城兵  
大又狼狽し蜘蛛の子を散らさく我がらに逃上りける  
を光秀鎧を取て真先ふまきうは森も坂井も一  
同又引返し揉まをまきを攻たりけりうれ共光秀  
謀しころあれば急も進まばう城兵乃途を失ふと  
城戸を引入るやうあうらふたり吉田出雲守もこの  
こととさうと見へ切所を盾まうらう味方を退を  
んと術を盡して戦へども逃る味方追来る敵と混  
亂して心のちなるがごとく漸城際らうらうけられ  
出雲守と嫡子新助城戸乃左右小扣えて付入敵を防



ぎげて明智が勢短兵急又責付とまじども城兵はく  
防ぎけとば謀一様にも付入とを得て吉田出雲守  
ハおろひのちと又城中に引入て後所くをせらむた  
めと光秀森坂井一手あるて関を作し責鼓を打  
て城際へお一寄一をもめども更みそのあつを見  
どいづつ小弓鉄炮をもちらて足輕軍の時とらじ  
りり小水下がかゝる五百余人の兵士の内より一人  
堀際へ馬をのり居城兵又向ひく當城只今落んとす  
その方ども何を頼て防戦とらそをやく降参して  
一命を全く一年来の妻子も面會せしや左もな  
くハ城壁とともを眼前に粉のごとく打碎りて一あな

哀れやあまいとぞやと呼らう五百余人一同よどろ  
と笑ひしつを城中城外さらよその心を得て森坂井も  
あれをあやしと何るれ左様のことをいせと尋ね  
りよ木下が兵ども當城只今落去仕てく一番乗へ木  
下藤吉郎が手の者蜂須賀乃基稲田握田よてゆと高  
らりに答へてハ城中よてとあれをあやしと是ハ寄  
手のほろもどふと味方を疑はせんとのことありて  
左様乃とに惑えしるると城の武士頭長沼隼人を  
り廻つて士卒をいさめける言葉もいせと終らぬ一人  
乃大男立あられ寄手の謀又あらぬ實を見らやと云  
ちて隼人を取引寄只一刀小切く落とれをいもよ



らぬことあるれば城中以の外の周章一あハ何事とらぬ  
あもあぐ三十余人の兵士拔連と切廻るを見と何  
様城中又謀叛人あつと裏切るぞとれをい右往左  
往小驚きしをくうら又五色乃指物を堀の上あふり  
閃々内より城門を開きか彼木下り五百余人面  
もあつと一番乗ぞと呼そつと駈入たり森坂井明智  
も俱又進んぐ乱れ入るぞと城兵まあつと仰天一敵  
うとられば城中小をやくうり入込る味方うと思  
へ敵を助て城兵を破る吉田出雲守あきれそつと絶小  
五百ばうりを引率して本丸へうり入あつと専途とあ  
ふめたり残る兵ども大う討れそつと生捕を寄手の

勢二丸やぞお詰つ然るも光秀うらつとおそひ設  
一所に我勢をそやく付入るめ森坂井城際まであ  
寄り一時内より手を合せめんと謀うげととと  
吉田父子は支をりれておそふと紛れ入るを得る  
しる然るも木下の兵士と斯のどつと働ましか光秀  
が謀いづつと小成くうとつと犬骨折て鷹を取れ  
心地せしと心頭小怒りいで本丸を乗取とあつと無念  
とをりさんと頼り小士卒を下知して書をせけるあを吉  
田出雲守いやは防術を失ひ寄手いあつとけり既  
に本丸破らぬべく見へけるとき出雲守うらつと遂に  
攻破られ城よあつと多く乃その命を失ひ



とも佐々木六角の運を用くべき戦ともおそそれど然  
ば一やぶ城を開き士卒の命を助けぬやとく櫓らう  
傘を出し降参のよを呼らりけれど光秀諸勢を  
押えて事のよを聞らるに城を明渡しやべし  
て籠城乃士卒の命をゆりてとやを又免るく  
ば是非及をど一同小覺悟して戦死とてとのこ  
るれば光秀これを本陣へ送りけるは信長きさう  
めしとやとおそひ誥し侍どもを討んときは味方  
も若干討つて如き是をゆりて先途をいとれん  
と尤然とてゆりてこれけり光秀あまを城中へ  
達し早く城を明渡しとて催促をとりてに出雲守

大小ららるる城門をひらいて士卒を出し最末小父  
子打つて観音寺乃本城とて引てけり  
吉田出雲守重光の上野介重賢乃孫出雲守重忠乃  
長子ちりけり助左衛門と稱し後小露滴とらふ  
日置流弓術の名家あり子息新助といふ助左衛  
門重綱のこし  
かくてらら光秀本丸に入る役所を改めあれを成  
らせ箕作を攻落しつる由を本陣へ告ぐらふも時  
を已刻小過との上小木下の組の者一番乗せしを以  
て光秀が心快く快く明智弥平次あるく  
次郎郎等奥田三宅を呼ぶらふとて城に入る早く相



大限言一終末之三  
圖をあるさつとて叱りけしむ四人一同は答へけり  
様某等難く紛れ入りともなぐらに四人計あり外  
小入得しものをさうふらう透を見らうひうて  
乃手筈を合せゆえんとしつゝい処りつ頃に入込  
ゆひやらん木下乃組のものども大勢よて騒ぎ出  
てゆひ急某等が心勞りつづつとそわらうゆあう相應  
小首尾を合せ敵をば打取てゆつて首とも多くな  
せしむ光秀も木下乃手をやまき働合点ゆびいうちも  
不思議乃才覺るると古を巻くと恐れけりそれども  
首尾よく城を落せしとて面目よて諸勢をまうとめ  
本陣ふりつて言上せしむ信長大小悦喜やうは堅

固乃兩城を手はめよ時をも移さば攻取しあて用運  
の瑞相そといささか木下明智が勤勞を賞美  
せられけり

織田家譜ある九月十日江州愛智川ありて観音  
寺城を圍んとて先算作の城を攻しむ森三左  
衛門坂井右近柴田勝家先登とて佐々木承禎父子  
和田山城を築てあれを守らせけりよ信長濃州の兵  
とて和田山を押しめ直小算作小向ひ佐久間右  
門木下藤吉郎丹羽長秀淺井新八とて是を攻し  
む然る小城堅くしていまも陥いらざるよ三州岡崎  
より加勢小来りし松平勘四郎信吉ありて撃て遂

大限言一終末之三  
一三



大陽言一編卷之三  
に城と落と信長信吉の勇敢を感<sup>ん</sup>じて信吉の肝<sup>きん</sup>  
小毛<sup>こま</sup>をく<sup>く</sup>り<sup>り</sup>と賞<sup>しょう</sup>せられ<sup>れ</sup>とぞ

重修真書太閤記三篇卷之三終



